

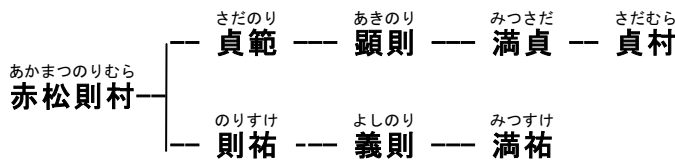
# 第3話 嘉吉の乱と幕府の衰微

將軍 義持の時からすでに衰え始めた室町幕府は、義教が殺され、  
 義政が悪政を行うに及んで全く衰える。 そのころの通用語であった  
 「下克上」が示しているように、到る処で下の者が上を凌ぐようになる。

室町幕府の全盛は義満の時代であって、義持の時には早くも既に衰えはじめた。 4代將軍の義教は、  
 生まれつき剛毅でしたので、再び幕府の威勢を盛んにしようと努め、さきには関東管領家を滅ぼし、その後  
 もしきりに我がままな豪族を抑えてその勢いを示したが、ついに赤松氏の勢力を削ごうとするに至って、  
 その怨みを買って殺された。

## 赤松満祐

赤松氏はさきの則村が足利尊氏を助けて大功を立てたために、代々幕府の重んずる所となって、  
 侍所の長官である所司になることの出来るいわゆる四職の1に数えられていた。



將軍 義教の時には、赤松氏は則村の曾孫（ひまご）に当たる満祐の時代で、播磨、美作、備前の3国  
 の守護をして頗る勢力があったが、満祐は義教に対して常に忠実に仕えていたので、義教もまた初めは  
 厚くこれを待遇していた。ところが、満祐の一族に伊豆守貞村という者がいたが、後に、義教は殊にこ  
 れを愛するようになったために、次第に満祐を憎み、折もあれば満祐の領地を割いて貞村に与えようと思っ  
 ていた。

## 三尺入道

その頃、將軍義教が赤松満祐を軽蔑して、大いに満祐を怒らせた話などいろいろな伝えられている。  
 これより先きに、満祐は髪を剃って入道して、名を性具といていたが、体が小さかったので、義教は  
 無遠慮にも三尺入道、三尺入道と呼んだ。満祐はいつも怒りを抑えていたが、よほど口悔しかったと  
 見えて、ある時、宴会の席で、「体は小さくとも3カ国の領主である。馬鹿にはされないぞ」という意味の  
 唱を歌いながら舞った。義教はこれを聞いてますます満祐を憎み、その後は満祐が来る度に家来に猿を  
 けしかけさせて、満祐が顔を引っかかれるのを見て喜んでた。満祐が終にその猿を斬り殺すと、今度は  
 犬をけしかけて苦しめた。満祐がその犬をも殺すと、義教は怒って、その仕返しにと、自分の邸に勤めて  
 いた満祐の妹を殺した。

## 嘉吉の乱

### 第3話 嘉吉の乱と幕府の衰微

それでも赤松満祐はなお怒りを抑えていたが、鎌倉の管領家を滅ぼしてからの将軍義教はいよいよ心が奢り、その翌年永享12年には満祐の弟の義雅の領地を奪って、これを赤松貞村と細川持春に分け与えた。また、一色義貫、土岐持頼らを大した理由もないのに大和に於いて誅したので、予ねてから義教に喜ばれていない満祐は、自分も同じ目に遭わされはしまいかと恐れていた。すると、たまたま今度は満祐の誅される番だという風説が立ったために、遂に先に自分が起って、あべこべに義教を殺してくれようと思案した。こうしてその時機を窺っていると、その頃、関東では、下総の結城氏朝が持氏の子の安王、春王を奉じて結城の城に立て籠もっていたが、その翌年嘉吉元年4月、終に城は陥り、安王、春王の2人は擒になつて、その5月に美濃で斬られてしまった。赤松満祐は関東の鎮まった祝いの宴を開くことにして、義教を自分の邸に招待した。時は嘉吉元年6月24日、満祐は部下に命じて、義教を討ち取る準備を十分にさせておいて、将軍を迎えた。

#### 将軍 義教の最後

将軍義教は、そんな企てがあろうとは少しも知らずに、僅かの家来を連れて赤松の邸に赴いた。やがて善美を尽くしたご馳走が出て、余興に猿楽の催しなどもあったりしたので、愉快に時を過ごしていると、夕方近いころになって、赤松家ではわざと厩の馬を放って庭中を追い回しました。そのうちに、「外に出すな、早く門を閉めろ」と口々に言つて、惣門を閉じて人々の出入りを禁ずると同時に、予て待ち構えていた300余人の伏兵が一時に起こつて、酒宴の席に乱入して義教を殺した。お供の中には、これを防ごうとして殺され、あるいは傷ついた者も少なくなかつたが、中にはまた、迎も敵することも出来ないのを見て、垣を越えて逃げ去つた者もいた。将軍足利義教は時に48才でした。その時の落首に、

赤松は伊豆に播磨を取られじと 御所の首をば嘉吉元年

というのがあつた。赤松は満祐で、伊豆は貞村で、御所は将軍の事だ。なお、落首というのは、嘲弄または風刺の意味を含めた歌の落書きのことだ。

さて、赤松満祐は、やがて幕府の討手が来ると思ひ、これを迎えて大いに戦う覚悟でいた。しかし幕府では、余りに突然の出来事に驚いたのか、その夜半に、坊さんが義教の死骸を受け取りに来た外には、誰一人として攻め寄せて来る者もいなかつた。満祐は3、4日待つてみたが、ついに5日の後に、京都の邸を焼き払つて播磨に帰り、今の龍野町の北方に当る城山城に立て籠もつた。

#### 赤松満祐の自殺

幕府では、管領の細川持之らが諸将と相談して、義教の子の義勝に将軍職を継がせることにして、山名持豊、赤松貞村らに命じて赤松満祐を討たせた。貞村はこの騒動を惹き起した原因となつた人だから、大いに働かなければならなかつたのですが、他の諸将と共に摂津の方から進んだ。貞村はまだ搦々しい功を立てないうちに、山名持豊の軍が但馬の方から烈しく進んで、城山城に迫り、十重二十重にこれを囲んで、ついに火を放つて急に攻めつけたので、赤松満祐は力が尽きて自殺した。年は62才でした。

### 第3話 嘉吉の乱と幕府の衰微

時に嘉吉元年9月のことでしたから、世にこれを嘉吉の乱と言います。

こうして赤松氏は滅び、満祐の旧領地は、持豊及びその一族に分け与えられたので、曩に明德の乱に氏清が敗れて以来、全く衰えていた山名氏は再び大いに興った。これに反して、赤松貞村は折角討手として差し向けられながら、何の功も立てなかったために、世間の人から頻りに譏られたりしているうちに、ついに病気に罹って死んだ。

#### 下克上

嘉吉2年11月、義勝は9才で將軍に任ぜられたが、その翌3年7月、赤痢に罹って亡くなったので、弟の義政が9才で後を継いだ。こうして幼少の將軍が相ついで立ったために、次第に幕府の権力は家来の者の手に移り、ついには下の者が上の者を蔑ろにして、これを凌ぐのが普通の事ようになって行った。其の頃の通用語に「下克上」という言葉があったが、これは下の者が上をしのぐことで、実にこの下克上こそ、これから後の室町時代の一般の風であったのです。



あしかがよしまさ  
足利義政

#### 將軍 足利義政の驕奢

さて、義政は、15才で將軍に任ぜられて、19才の時には既に従一位に進んだが、幼少の時から贅沢に育てられたので、世の中の事などは一向に構いつけずに、専ら奢りを極めて遊び暮らしていた。嘗て武者小路高倉という所に母の邸を営んだが、その腰障子一間の価が20,000錢（当時の20,000錢だと米200俵を買えた）であったというのを見ても、如何にその全体の費用が莫大であったかがわかります。

#### 後花園天皇が將軍義政を戒める

將軍がすでに贅沢なので、これに仕えている役人らも従ってその真似をするようになり、しかも、その費用はすべて人々から搾り取るのですから、人々はみな非常に苦しんだ。のみならず、その折柄、諸国には大風や洪水がしきりにつづいて、五穀は実らず、悪病がはやるといふ有様でしたので、人々はいよいよ苦しんだ。しかし、義政は少しもこれを憐れもうとせず、さかんに室町の邸を営んだりしたので、第102代後花園天皇は大いに御心を痛められ、次のような御製の詩を將軍義政に賜って戒められた。

ざんみんあらそつてとるしゅようのわらびを  
残民争採首陽薇

しよしよとち ろをとぎす ちくひを  
処々閉「炉鎖」竹扉

しきょう ぎんするに いたましはるにがつ  
詩興吟酸春二月

まんじょうのこうりよくためにか たがこゆる  
満城紅緑為「誰肥

この意味は、今や人々は餓えて、野や山の草の根をすら争って採って食べているほどであるのに、汝は

### 第3話 嘉吉の乱と幕府の衰微

いったいどういうつもりか？ というほどの事です。 さすがの義政もこの時ばかりは大いにおそれ入って、その工事も止めて、しばらくは慎んでいたが、やがてまた花見の宴を催したり、茶の湯や能楽などに耽つたりして、政治の事などは少しも顧みなかった。

#### 重い税

そして、そういう費用が嵩んで、幕府の財政が乏しくなると、国辱となるのも頓着せずに、しきりに使いを明国に遣わして永楽銭を求めたり、あるいは倉役といって質屋に課する税をたびたび取りたてたりした。この倉役は、義満の頃には1年に4回くらいでしたが、義政の時には月に8,9回も取りたてた。いかに彼が人々の迷惑をも察しないで、重税を課したかがわかるでしょう。

#### 徳政

しかし、更に一層甚だしいのは、しばしば徳政を行ったことです。この徳政というのは、もとは貧民を救うために、その滞っている古い租税を帳消しにしてやる一種の仁政でして、わが国ではずっと古く奈良時代から朝廷で時々行われていたものです。鎌倉時代の末に、武士の窮乏を救うために、幕府がこの徳政と称するものを行い、武士の借金は一切返さなくてもよいということにした時から、その意味がまったく違って来ました。

これが室町時代になると、すでに前にもたびたび述べたように、幕府がしきりに重い税を人々に課して、無理にこれを取り立てたために、民はますます生活が苦しくなり、借金ばかり殖えて、税など迎も満足には納められなくなってしまったので、ついに民のほうからあべこべに徳政令の発布を幕府に迫って、一切の貸借を無効にさせるというようなことを始め出した。しかも、これには暴動を起こして狼藉を働いたのです。

#### 徳政一揆

すなわち、第1に先づ彼等の金融機関であった質屋を襲って、お金を払わずに質物を取り返したり、酒屋や寺院へ乱入して品物を奪ったり、証書を破って棄てたりした、そして、もしこれを拒んだりすると、火を放って何もかも焼き払ったのです。世にこれを徳政一揆と言います。勿論、幕府は諸将に命じて鎮圧させたが、根本の原因である悪政を矯めることを全くしなかったため、鎮圧はいつもその場かぎりのものとなって、同じ暴動がしばしば繰り返された。それで、ついに幕府はこれを制する事が出来なくなると、止むなく徳政令を発して一切の貸借を無勘定にさせることにしていました。

#### 徳政令の発布が13回も

これが義政の時代になると、管領以下の将士もまた将軍にならって奢侈に耽り、その費用が困ると、豪商らにお金を借りたが、返す道が全くなかったため、ひそかに人々を煽動して、一揆を起こさせる一方、将軍に迫ってしきりに徳政令を発布させた。実に義政1代の中にこれが13回にも及んだというのを見ても、いかに彼の政治が乱れていたかがわかります。

### 第3話 嘉吉の乱と幕府の衰微

かくして徳政は、当初の意味の仁政ではなくなって、全く一種の暴政と化したのです。なぜって？ 考えてみてください。折角働いて、節約して、貯蓄して得たお金を他人に融通したのが、一切返してもらえないということになったとしたら、誰がまじめに働いて、貯蓄などをする者がいよう！ 少なくとも、2度と他人にお金を貸すという事はしなくなるにちがいない。

#### 徳政の悪結果

しかし、もしそうなったら、その結果はどうなるか？ お金のない貧しい者はその日から食べるものにも困るでしょう。勿論、働いてお金を儲ければよいのですが、世の中のことは、ただ働きさえすれば直ぐにお金が儲けられるとばかりはいえないのです。これは例を農業に取っても、商業に取っても、直ぐにわかるでしょう。

例えば商売をするには、先づ品物を仕入れなければならないが、それには資金が要る。農業にしても同じことで、第1に先づ作物を植えつける田なり、畑なりがなければいけません。また、田なり畑なりがあったとしても、それを耕して収穫を得るまでには相当な月日がかかるし、田畑によっては肥料も施さなければならない。金のない、貧しい者が、全く他から融通してもらえなかったとしたら、どうしてこれらの用意をしたり、収穫なり利益なりのあるまで食いつなぐことが出来ようか？ 況して田畑もなく、資金もない者には、働こうにも働きようがないではありませんか？

#### 幕府の衰微

そういう状態だったにもかかわらず、将軍義政は相変わらず奢りに耽って、人々の事などは少しも顧みようとしなかったし、諸国の大名もまた将軍の悪政にならって、何とか名目を設けては頻りに重税を課したので、天下を挙げて人々はいよいよ疲弊するばかりでした。

こうして田畑は荒れはて、盗賊は到るところに起こって、まことに物騒千万な世の中となり、良民は一日として安心して暮らせないようになりましたが、幕府にはもうこれを取り締まる力もなかった。実に、それほどまでにも足利氏の勢力は衰えていたのです。しかも、なお一層これに拍車をかけたのは、やがて起こった応仁の大乱です。

( 第3話 嘉吉の乱と幕府の衰微 終わり。 次は前頁に戻り、第4話 応仁の乱 へ)